

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者名

安藤 洋平

論文題名

E・M・フォースターのフィクション研究—関係性の中の「個人」たち—

本論文では、「個人的人間関係」と「私生活」を重視した E・M・フォースター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) の物語世界において、個々の登場人物がいかにして規範的価値観に異議申し立てをして抗い、好ましい自己像を確立したり、もしくは望ましくない価値観に折り合いをつけたりするのかを、テキストを綿密に分析しながら検証していく。さまざまな関係性、社会的なつながりから個人的なつながりまでの中で、「個人」がどのようにして自己像を確立したり、時にはそれに挫折したりするのかを見てみたい。個々の関係性が提示する問題、すなわち、フォースターのフィクションが提示する問題の考察により、結果として、フォースターのフィクションが提示する「個人的人間関係」とは総じてどのようなものであるのかが見えてくるだろう。

本論は批評的視点としてジェンダー（とりわけ男性性）を多く取り上げているが、その理由は、①フォースター研究におけるジェンダー批評および男性性研究が比較的少ないこと、②現実社会においても物語世界においても、性（ジェンダーとセクシュアリティ）の問題それ自体が、ジェンダー化された主体を前提とする社会の中で「個人」がアイデンティティを形成して社会生活を送るうえで重要なものであるということ、さらには、③フォースターの時代にはフィクションの検閲や同性愛の違法化によって性の問題が文学表現に切っても切り離せないものであったという事実を含む時代的・文化的・社会的背景からでもある。また、④フォースター自身の同性愛指向ゆえに、ジェンダー規範との相克が逆にプロットの展開におけるダイナミズムとなっていることが多々あり、ジェンダーについて考察することなくしては、個々の関係性や各作品をより深く探ることが不可能であると思われるからである。

本論は二部構成となっており、六章から成る第 1 部では短編小説を、四章から成る第 2 部では長編小説を主に取り上げている。

批評史上軽視されがちな短編を分析対象とする第 1 部では、ジェンダーおよびセクシュアリ

ティを中心的視点とする。少数の人物や事象のみに語りの焦点化がなされる短編の特質ゆえに、特定の「個人」のジェンダーおよびセクシュアリティ（観）の綿密な考察は、特に短編に有効な読解法かと思われる。性の規範とそれに対する価値観の対比という、一見すると読みの結果はどれも類似しているように思われるが、それはあくまで根本的な軸としての結果であり、それぞれの性の表象を紐解いていく作業は、個々の作品の価値を立証することになるだろう。そして、本来は「個人」によって異なるはずである複数的なジェンダーの価値観を、単一的なものに還元して性の秩序を保とうとするジェンダー・イデオロギー（という幻想）に登場人物個々人がどのように折り合いをつけるのかを見ていくことは、フォースター研究にも、文学研究のジェンダー批評一般にも、さらには、ジェンダー研究一般にとっても意義ある作業となるだろう。

本論の特色としては、これまで多くの研究対象となってきた長編を扱う章よりも短編を扱う章が多いことである。フォースターの研究書に特徴的な短編を概略的に論じるという方法ではなく、一章につき一編ずつの作品論としていくスタイルを取る。このようなスタイルは、ここ十年ほどで学会誌を中心に徐々に増えつつあるものの、その数は十分とは言えず、今後さらに発展していく必要があるだろう。本論で扱う六編に新たな解釈が提示できれば良いと思う。

第1章では、20世紀初頭に新たな文学ジャンルとして勃興した短編に特徴的な技巧の一つである「エピファニー」が、伝記的側面の多い短編「アンセル」(“Ansell”)において著者と同じ名前の主人公エドワードのジェンダー観の変容にどのような効果をもたらしているのかを論じる。エピファニーは、短編の技術的な特徴としてジェームズ・ジョイス (James Joyce) が確立した技法の一つであり、キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield) らモダニズム作家の短編において多く用いられている。しかしながら、実際にはフォースターは彼らに先んじてエピファニーを多用していた。フォースターのエピファニーの特徴は、その啓示的瞬間を機に、男性登場人物が別の男性登場人物との親密な関係性を築くことによって、規範的価値観／規範的ジェンダー観の放擲と好ましき自己像の確立を達成させることにある。本章では、エドワードと彼にそのような機会をもたらしたアンセルのジェンダーの表象を読み解きながら、エピファニーの意義を検証している。

第2章では、第1章で論じる拮抗する異なる価値観の男性性という構図を軸に、「あるパニックの話」(“The Story of a Panic”)を語りと語り手の男性性という観点から論じる。この短編

は、フォースターが嫌悪するパブリック・スクール精神や実利主義という規範的男性性を誇示する人物を語り手としているという点で、フォースターの他のフィクションとは一線を画している。この語り手タイトラーは、フォースターの倫理観とは異なる人物であり、語り手として物語世界を支配するだけでなく、実際に登場人物としても支配的立場にいる。なぜあえてこのような語り手をフォースターが採用したのかを疑問点・出発点とし、「あるパニックの話」の語りによって、首尾一貫する価値観を念頭に置くイギリス中産階級出身男性の規範を体現する語り手が、首尾一貫性の欠如する語りを展開させることで、彼の拠り所とする価値観とそれに付随する男性性への不信用性を露呈させながら、規範的男性性の内包する矛盾を露呈するというフォースターの規範的男性性への語り上の姿勢を考察している。フォースターは、タイトラーの階級意識や異民族蔑視を語りの上で批判しつつ、語り手としてのタイトラーの男性性に曖昧性を付与することで、規範的男性性をまったくの批判の対象とすることを回避し、ある意味では救いと共存の余地を与えていると考えられる。

第3章では、主人公ハロルドと友人トミーの間に同性愛の表象が半明示的であるために、批評史一般では軽視されがちな「エンペドクレス館」(“Albergo Empedocle”)を取り上げる。この短編のジェンダーの表象を辿りながら、「同性愛」の物語として解釈する場合、テキストのどの部分はその根拠となるのかを探る。それは従来はこの短編の同性愛的読解の問題点を挙げる作業ともなると同時に、セクシュアリティを同定することの不可能性という、読みの多層性を提示するようなテキストの可能性を探ることを目的ともしている。同性愛的欲望の担い手が語り手であるトミーと考えられること、そして、ハロルドのジェンダーおよびセクシュアリティの表象に断続的に見られる同性愛的欲望を断定してしまうことで生じる矛盾点を挙げながら、この短編を、セクシュアリティを同定しない「クィア」なものであると論じている。

第4章では、フォースターの作品では唯一のサイエンス・フィクションである「機械が止まる」(“The Machine Stops”)を取り上げ、物語世界における過去の人間性とジェンダー(男性性)を取り戻そうと努める主人公の試みを、現実世界のジェンダー規範の切り崩しに向けた試みとして論じる。そこには産業化・都市化によって緑が失われつつあるイングランドに対するフォースターの過去への憧憬と未来への社会改善の期待が反映されていることは言うまでもない。ここでは、フォースターの性についての作品解釈に多いセクシュアリティを視点とする読解法には依拠せず、ジェンダーを読みの視点としている。

第5章は「要点」(“The Point of It”)と題する難解な短編の〈要点〉とは何なのかということを中心に、サブプロットを炙り出していくことで一つの解釈を試みる。一人の男の現世と来世を描くこのファンタジーの明示されない意味を性の観点から明らかにする。要点を悟ることで若くして亡くなったハロルドと、要点が分からずに生温い人生を終えるミッキー。死後の世界でハロルドと再会することによってミッキーは要点をようやく理解することになるが、冒頭のシーンにおける二人の親密な関係と、結末での二人の再会から、その要点には同性愛的意味があることが語り上の言葉から明らかであることを立証している。

第6章は「あのと時の船」(“The Other Boat”)の主人公ライオネルの死が意味することをジェンダーの視点で考察する。その意味を探るためには、巧妙に人物造形や人間関係に織り込まれる表象としてのジェンダーを辿りながら、英国人主人公の分裂したアイデンティティの問題を考察する必要があるだろう。異人種との同性愛行為の果ての自死は、たしかに悲観的なものではあるのかもしれないが、現世との決別という意味でフォースターのフィクションでは死が肯定的な意味で用いられているという特徴の顕著な例である。

第7章では、初期の長編『天使が踏むのを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*)と『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*)に、同じく地中海地方を舞台とする短編を加え、最初期の「イタリアもの」としてまとめ、これら最初期の作品群に見られる「個人的人間関係」、つまり、個人と個人の「結びつけ」の作業をさまざまな関係性から論じる。この章はフォースターのフィクションにおける人間関係の構図を示すという意味で、本来であれば第1章としても良いものであるが、短編研究と長編研究として二部に分ける本論の構成上、中間地点に当たるこの位置に置くことにした。イギリス人と地中海地方の現地人との関係や、男同士の関係、男女の関係など、さまざまな関係性に付随する問題点を、それぞれの関係ごとに考察した。これら初期の作品群には、作家としての未熟さによるものであるのか、規範的価値観を超えることのできない関係性と、その後の作品に通じる性の曖昧さが付与された関係が多く描かれていることが分かる。

第8章は『ハワーズ・エンド』(*Howards End*)においてフォースターの批判対象である帝国主義的・実利主義的男性性が完全に否定されるのではなく、そうした価値観には本来相容れない知性・理想主義といったフォースター的価値観が、それにどのように折り合いをつけ、異なる価値観と価値観とが小説のエピグラフのようにいかにして「結びつけ」られるのかを分析す

ることを目的としている。一見単純なシュレーゲル家の「女性性」とウィルコックス家の「男性性」の対立の構図が、実際には常にジェンダー・イデオロギーを揺るがす形で表象されている点を綿密に読み解きながら、小説の根幹とも言えるハワーズ・エンド邸とその他の家屋敷が複雑な「結びつけ」にどのような形で寄与しているのかを検証している。それはある意味でのこの小説の主人公とも言えるべきハワーズ・エンド邸の「中性性」が、この物語の中心軸ともなっており、規範的なジェンダー観の脱構築と、階級意識の変容につながる結末へと「結びつけ」ている点も重要である。

第9章では、同性愛を真っ向から描いた作品という点で英文学史上記念碑的作品とも言える『モーリス』(*Maurice*)を取り上げる。エドワード・カーペンター (Edward Carpenter) の影響から「肉体性」に重きを置かれがちなこの小説であるが、実際には書物を始めとするさまざまな「書かれた言葉」が主人公モーリスの成長物語を可能にし、階級差を超える男同士の関係を成就させる結末にしかと運んでいく過程を辿っていく。古い権威的な書物としての聖書やギリシャ古典作品に対し、宇宙進化論やチャイコフスキーの伝記、そして、労働者階級アレクからの書記言語規範を逸する手紙など、いわゆる新しいテキストが物語展開とモーリスとアレクの関係構築に如実に寄与していることが明らかである。

第10章では、フォースターの最大傑作『インドへの道』(*A Passage to India*)を取り上げる。小説中でイギリス人が求める「本物のインド」を見ることはできるのかをテーマに、イギリス人個々人の異文化「理解」の方法とインド表象とを辿りながら、異文化交流の困難について考える。インド人とイギリス人という植民地下における単純な二項対立的関係ではなく、宗教等に基づきさまざまな共同体が共存するこの物語世界では、互いの境界線を超える関係の構築が困難である点が散見される。結末におけるインド人アジズとイギリス人フィールディングの友好な関係を確立することの困難は、植民地政策における主従関係という時代的問題上、致し方ないことである。それは、フォースターが同時代の問題を、包み隠さず客観的に表現した結果なのである。この章ではこれまでの批評に準拠しながらオーソドックスな読解を行っている。

以上が本論の構成である。フォースターのフィクションにおける「個人的人間関係」は、それまで異なる価値観を持っていた者同士で築かれる関係性が多い。それは、ただ単に異なる価値観を「結びつけ」というものではなく、ときには失敗の危険を孕みながらも、無事に達成されたり、また逆に失敗に終わってしまったりする。またときには、イギリス人中産階級の身

勝手な行動、自己充足、自己解決などによって、異なる民族・人種・階級出身者の犠牲を伴うこともある。しかしながら、そうした失敗は、性の規範、階級意識、異民族蔑視、植民地の問題等、時代のイデオロギー上致し方ないことでもあり、それこそがフォースターが提示する「時代的問題」と言えるのではないだろうか。

現実社会の価値観変容への期待と過去の英国を取り戻したいというフォースターの願いは、同時代の社会にではなく、つねに「先に」向けられている。これもまたフォースターのフィクションに顕著である特徴の一つと言えるだろう。未来の世界に過去の人間性の回復への希望を託すクーノ、家族制度の変容を暗示させるシュレーゲル姉妹、ヘレンとレナードの子供がトムと将来築いていくであろう中産階級の境界を超える関係性、緑の森へと逃れるモーリスとアレク、友情を先延ばしにしたアジズとフィールディングなど、本論で取り上げてきた「個人」たちやその関係性だけを見てもそれは明らかである。同時代の形而下の問題系を提示しながら、現状が改善され、「個人」が「私生活」を重視できる社会をフォースターは未来に求める。それは社会的な意味だけでなく、個人的な意味でも同じであり、「個人」を縛りつける日常の「重荷」を提示し、フォースターが同情的な態度でもって描き出す登場人物たちは、それぞれがそれぞれの「重荷」に向き合う。フォースターが提示した問題系には、彼自身が嫌っていた規範的価値観、個人的に相容れない価値観も勿論含まれていることは明らかだが、それらを完全に否定しつくすのではなく、関係性のどこかに希望的狭間を残し、共存を可能にする余地を与える。つまり、違いを違いのまま残しておき、決定不能性を付与するのである。ここにフォースターのフィクションにおける「個人的人間関係」と「私生活」の重要性が、そして、「個人」に対する同情の精神と洞察力の鋭さが見られると言えるだろう。

フォースターのフィクションは、常に新たな視点で読み解かれてきたと同時に、常に新たな視点を歓迎する。それは、各時代の思想のトレンドや知のモードに共鳴するほど多様な問題を含んでいるということも勿論だが、時代に関わらず、人間の根幹につながる問題やどの時代の規範的価値観をも揺さぶる可能性をフォースターのテキストが（おそらく意図的に）孕んでいるゆえのことであろう。さまざまな関係性の中でフォースターの作品の中の「個人」たちは、読者に共感を求め、無意識にも反感を買うこともありながら、人間の規範に対しての盲従的態度や規範を押しつける体制側についての問題をつねに提起し続けるのである。